

長野県松本深志高等学校 視察報告

～自治の追求により骨太のリーダーを育成する高校～



登録有形文化財に指定されている教室棟(11月1日撮影)

令和5年11月1日(水)、長野県松本深志高等学校を視察した。同校は、本年度、創立147年目の男女共学の公立高校である。「高いレベルでの様々な学び」を通じて、「自治の校風」を追究しその理想を具現化することにより、他者と協働してよりよい社会を創造し支えることができる、力強く骨太な人材育成をめざしている。社会の様々な分野で活躍する卒業生を多数輩出し、今春の卒業生の主な進路先としては、北大13名、東大3名、国公立大・医・医合計25名等となっている。部活動競技や各種コンテスト等で、全国レベルの活躍を見せる生徒もいる。生徒の自治を重んじ、校則や制服を定めていない。学業、部活動、生徒会活動、課題探究等、学校教育全体を通じて、自ら考え、自らの責任で行動できる人材を育成している。

ぐんま 高校教育新聞

2023年11月17日
第125号
発行
群馬県総合教育センター
高校教育研究係
(長期研修員)
小林 育美
(県立富岡高校)

生徒会活動 ～探究的に自らの課題解決を図る場～

「深志の自治の象徴」とも言われる「とんぼ祭」は、毎年七月に四日間にわたって開催されている。とんぼ祭を実施する目的や企画内容、当日の運営、感染症・熱中症対策等の危機管理に至るまで、生徒自身が議論を重ねながら作り上げている。生徒はこのとんぼ祭を日頃の研究の成果や、仲間との協働を発揮する場と考えている。

生徒会予算約七百万円の使い道に関しても、生徒達が折衝会・生徒大会を経て、自ら決定している。予算折衝では、各部の請求に対し、会計経理委員会が綿密な調査を行い、長期的な視点で購入する物品の優先順位を判断しながら、調整を図る。議論が白熱し、長時間に及ぶことも少なくないという。

さらに、部活動中における近隣住民への騒音問題についても、生徒自身が抱える課題であると捉え、地域の方と連携しながら、その解決を図ったという。この課題を機に、「鼎談深志」という組織を立ち上げ、住民・生徒・学校がよりよい地域コミュニティを構築するために対話を重ねている。

こうした自治活動が可能となつているのは、長い歴史の中で先輩から後輩へと受け継がれている深志の精神の他、教員の生徒に対する関わり方も大きいと感じた。対等の大人として生徒と対話する姿勢、会議や予算折衝の後には丁寧な話を聴き、必要な情報提供を行う等の後方支援も欠かさない。生徒の自己肯定感を大切に、あくまでも陰から支える形をとっている。



丁寧な質問に答えてくださった校長先生(右)・教頭先生(左)

知の探究



英語の授業における協働的な学びの様子

同校では、課題探究や信州大連携ゼミ、各分野の第一線で活躍する卒業生を講師とした特別講義等を通じて、生徒が本物の学びや、実社会とつながる学びをつかむ場を創出している。また、日頃の授業では、教員の個性が活かされ、探究型の学び、協働的な学び等、様々なスタイルの学びから、知の探究を深めている。

生徒が学校をプロデュース

松本深志高校の生徒は、学校の広報活動にも積極的に携わり、学校の魅力を発信している。そのうちのひとつが、生徒が管理する「生徒ブログ」である。学校行事や部活動、日々の学校生活に加え、高校受検を控えた中学生に向けて、学ぶ意義や進路選択等についてのメッセージも発信している。また、中学生体験入学では、生徒が「深志高校のリアル」を伝えている。生徒自ら作成した動画をもとに、中学生向けに説明を行うほか、保護者や教職員対象のパネルディスカッションを通じて、生徒・卒業生が保護者の不安に丁寧に答えている。さらに、生徒は、中学三年生向けの学校パンフレットの作成も手掛けた。中学生に伝わるように、内容やレイアウト、配色、写真収集、文章作成等を工夫するとともに、業者の方や先生方も綿密に打合せを行ってきた。パンフレットの表紙をめくると、石川裕之校長先生と現生徒会長の生徒が「深志の自治」について熱く語り合うページが登場するなど、特色ある仕立てとなっている。

編集後記

今回の訪問では、昼休みに、前生徒会長と前会長補佐役の生徒二名と対談する機会も設けていただいた。その中で、生徒は「深志は、伝統校ではなく、traditionalな学校です。昔のものをそのまま引き継ぐのではなく、社会の変化に柔軟に対応していきたい。」と熱く語ってくれた。昨今、正解のないVUCAの時代と言われるが、深志高校の生徒は、自ら考え、判断し、行動している様子が見て取れた。陰ながら支えてくれる先生方への敬意も持ちながら、自治の精神を発揮している生徒の姿に大変感銘を受けた。